

## 勤務医部会だより

### 個人的高齢化と向き合う



幹事 秋山 清次

人は誰でも歳をとるもので、いろいろな時に実感する。私はこの20年山登りを趣味にしていたが、昨年病院の人達と蝶ヶ岳に登った。上高地から入山し、蝶ヶ岳ヒュッテに1泊して翌日横尾に降りたのだが、途中から大腿四頭筋に痛みが走り、今まで経験したことがない熱いような痛みで、横尾に降りたら少し休もうなんて考えていた。しかし着いたら立てなくなり、立ち上がってもちょっとしたことでもぐんと膝が落ちてしまう状態となった。とにかく帰らなくてはと上高地までの10kmを歩いたが、とても苦しい経験だった。わずか3年前には1日で上高地から蝶ヶ岳、常念岳に登って常念小屋に泊り、翌日には大天井岳、赤岩岳、西岳と縦走し、槍沢ロッジまで下りても問題なかった足が、たった2年でこんなになるなんて想像もできなかった。その後スポーツクラブに通い、少し自信がついたところで白馬岳に登り、樽池に下りてみた。下りはごつごつとした大きな岩の転がった悪路で、無事下山できてほっとした。考えてみれば腰を痛めてからほとんど運動をせず、ゴルフで歩くからいいかなんて甘い考えを持っていたが、手痛いしっぺ返しであった。女性と比べて男性は急激に筋力が衰えるとのことだが、身をもって体験した。先日敬老パスをもらい、そして追い打ちをかけるように市からチェックリストが来た。預貯金の出し入れをしていますかとか週に1回以上は外出していますかとか自分で電話番号を調べて、電話をかけることをしていますか等々、これが自分を見つめる世間の目かと甚だ不本意であるという思い、こんな年齢になってしまったのかという思いが交錯する。人はこのようにして心も老いていくのか。

私は今年で大学を卒業して40年になった。ちょうど8年前、私にとってキャリア最後の場所と心に決め、はじめて私的病院である済衆館病院に赴任した。約半分の22年を大学で、研修医時代を含めた10年を市民病院や国立病院で過ごした。振りかえってみる

と、ここに来るまでは手術の経費や医療器具の値段などあまり考えたことがなく、確かな手術をやって、患者さんに元気に帰ってもらうことが医師の努めと考えていた。今もその心は変わらないが、もうひとつできれば経費を抑えたいと思うようになった。公的病院と違い、経営が危ないからと誰かが助けてくれることもなく、自助努力で乗り切るしかないのだから当然である。しかし手術を行う者として、手術器具や手術材料を削ることは外科医のモチベーションに影響し、あまり賢い選択ではない。医師や看護師が疲れすぎると離職の問題もある。特に昨今の看護師不足は、医療行政のまずさも一因と考えられるがどうか。とにかく病院経営の難しさを実感している。

済衆館は急性期病床108床、地域包括ケア病床60床、回復期リハビリ病床40床、療養型病床60床、トータル268床の北名古屋市でただ1つの病院である。昨年創立100周年を迎えた。産婦人科医院から出発し100年続いたことは至難の業であり、記念誌を読むと多くの困難を乗り越えて現在に至ったことがわかる。今年から新病棟（92床）の建設が始まり、緩和ケア病棟（20床）を含む360床の病院に生まれ変わる。

緩和ケア病棟ができることから、私はこの3月で外科医をやめ、今後は緩和ケアを中心にやっていくこととなった。大学時代多くの癌手術を行い、後に再発した患者さんが最も主治医を必要としている時に他病院の医師に頼まざるを得なかったことが、心に重くのしかかった。大学を出てからは再発患者の治療や緩和ケアに興味を湧いた。ここに来てからは患者さんを最期まで診ることができて、少し心が晴れた。緩和ケア病棟は急性期と違って患者さんと心の交流ができるので、できるだけゆっくりと接したいと思っている。長い間人生を走って生きてきたので、緩和ケアは時間の流れが年齢に合っている気がする。

これからいつまでできるかわからないが、体が続く限り患者さんや病院のスタッフと共に少し歩幅を縮めて歩いていきたいと思っている。

（済衆館病院）